

李大釗の出版

——「言治」期の政論を中心に——

里井彦七郎

【要約】 有名であり、その歴史に果した役割が喧伝されながら、意外にも研究されていない人物——李大釗もその一人である。とくに、マルキストになるまでの彼については殆んど研究らしいものは無い。本稿では、一九二一—二四年頃の青年李大釗が、袁世凱一派系統の研究者集団（北洋法政学会とその機関誌「言治月刊」）の中にあつて、どのような問題とどのようなとりくみ、亦どのようなにして、袁世凱擁護的な立場と思想を克服して行つたか、いわば、擁護的思想からの彼の飛躍・脱出の過程を考察する。それ故、李大釗と云えば科学的な世界観に武装された革命家がただちに想い出されるし方で、とり扱われて来たこれまでの彼と違つて、むしろ視野の狭い、客観的には反動的役割さえ果した、その様な李大釗がここでは主な対象となる。——というより、その様に低い段階の中で、彼がどの様に成長しようとする模索したか、その李大釗の成長の過程をとらえてみたいと思う。

一、小さいことから

五・四時代、中国にはじめて本格的にマルキシズムを移植し、積極的に扱めつつ、一九二一年の中国共産党創立に参加、ついで、いわゆる第一次国共合作（一九二四年正式成立）などに活動したあと、革命及び党の毛沢東的發展に参

劃することなく、一九二七年四月二十八日、軍閥・張作霖の手で殺害された李大釗——その草創期コムニストとしての名は余りにも有名であり、彼に関する研究も、ほぼ、一八年を転機に、マルキストに成長したあとの諸活動とその位置づけとに集中されている。李大釗の研究として、誠にふさわしい動向であろう。

ところで、革命家李大釗が、どの様にして形成されたかという問題をかかえてふりかえつてみると、吾国はもちろん、中国でも、研究らしい研究は殆んど見られないのである。中華人民共和国の成立にともない、この革命の先覚者に対する関心と研究が深められつつあるので、初期李大釗に就てのすぐれた業績も、やがて発表されるに違いない。

現に、これまで殆んど顧られなかつた初期の、彼の著作目録が地道に整備されつつあるし、従来知られなかつた彼の論稿も次第に掘り出されて来た。新しい動向として、大いに期待したいが、目下のところでは、なお研究としては結実してはいないようである。のみならず、そこには、ゆるがせにし難い問題が見出される。要約すれば、マルキストのなるまでの李大釗を、も早や検討する必要のない程自明の進歩主義者と定義づけるか(劉弄潮氏)^⑤、或いは、その思想の進歩的側面のみを抽出する(王同策・石俊・任継愈・朱伯崑・丁易・劉毅松氏等)^⑥という傾向である。これらの諸氏は、大てい、李大釗が一六年に発表した「青春」(「新青年」の一節などを根拠にし、当時の彼が「頑強進攻の戦闘精神」(王氏)「勇猛堅強の思想」(丁氏)「勇猛直前の思想」(劉毅

松氏)に武装された、戦闘的ブルジョア民主主義者であつた点を評価する。確かに、この側面を無視するならば、あの時代と、その時期における彼の役割とは、正しく把握出来ないであろう。だが、「青春」発表の約一年後、同じ李大釗は、資本家と労働者、貴族と平民、地主と佃戸の協力・調和を高唱し、これらの協力と調和があつてはじめて、現代文明の進歩と社会の幸福とが達成されるのだと主張しているのである。(「青年与老人」(「新青年」三ノ)同じ一七七年に発表された彼の他の論稿——「關偽調和」(「太平洋」一ノ八・一)や「暴力与政治」(「太平洋」一ノ七・一)「一七・一〇・一五刊」などを併読すれば、一七年代の彼が、「調和主義」の側面を強く持つていたことが一層明らかになる。かかる側面を見落して、進歩的側面のみを強調することは一面的な理解と云わねばならぬ。亦、辛亥革命から、五・四に到る過程、即ち、青年李大釗がそこに生き悩んだ時期の中国社会は、彼をして直線的に、戦闘的民主主義者たらしむる程、坦々と発達しつつあつたとは考えられない。彼自身、一三年七月八月頃、「社会の黑暗なること、中国四千年の歴史中、今日より甚しい時代はなかつた」と嘆しつつ、その黑暗社会を現出せし

める根源とその打開策について、切実、且つ、矛盾にみちた思索をつづけているのである（本稿参照）。きびしい中国の現実とそれに対する彼自身の——何らかの社会的階層を代表する所の、彼自身の対決の過程をぬきにして、進歩的側面のみを導き出すことは、やはり一つの偏向だと思ふ。もちろん、従来の研究のアンチ・テーゼとして、李大剣の弱々しい側面や歴史的制約のみを強調することは、逆の偏向におち入る。吾々にとつての、かなめの問題は、人物とその思想の發展を、部分的一面的でなく、全体的全面的に、且つ、つねに矛盾の法則に照らして、發展的にとらえねばならぬという、方法にあると思ふ。新中国での李大剣研究に期待すればする程、この点は、強調しておきたい。

本稿では、初期李大剣の、従来の研究のブランクを少しでも埋めるため、亦、方法の点でも、右の如き反省の上立ちつつ、私が読み得た彼の諸論稿中、最も初期に属するもの、即ち、「言治月刊」第一—第四期に発表された彼自身の諸著作（本稿七—八頁著作表参照）を主材料に、この時期の彼が、どんな所から出發し、いかなる問題とどのように對決しつつ、どんな摸索過程を経て、一步一步、自己の政

論を高めに行つたか、亦どのようにして、「言治月刊」を離れ、ほぼ一四年から始る次の時期に移行して行つたか等を考えたいと思ふ。

それは中華民国元年（一九一二）から同三年（一九一四）にかけての、せいぜい二年間であり、彼の年齢にして、二四—二六歳の、まさしく青年盛期に當る。それ故、本稿で扱う時期と問題は、三九年に亘る彼の全生涯（一八八八—一九二七年）と、その間に果した彼の革命的役割に比べて、極めて小さいだろう。だが、私は、敢えてこの小さいことから始めたいのである。この短い二年間は、辛亥革命（一九一一・一〇・一〇）から第二革命（一九一三・七一）を経て、欧米列強に支援された袁世凱一派の反動支配が、次第に明確に打ち出された、その当初の時期であり、李大剣個人についてみれば、袁世凱一派擁護的な思想を内包する所から出發し、それを克服しつつ發展して行く、極めて特徴的な時期でもある。この期の彼の著作が、北洋法政専門学会の機關誌「言治月刊」に多く発表されているので、仮りに「言治期」と名づけておいた。なお、「言治月刊」（第一—四期）は京都大学人文科学研究所所蔵のものであり、亦、友

人丸山松幸君との討論から教えられた所が多く、野沢豊君からも、その他の文献について種々教示を受けた。同所、両君に謝意を表しておきたい。

二、民主・共和をめぐるあらがい

アジアではじめて民主・共和の旗をかかげた辛亥革命は、専制主義的な旧中国の現状に満足できなかつた若々しいインテリの胸に、明るい希望の灯をともした大事件であつた。早く、清末革命の志士達が相ついで反満運動に生命を捧げるのを見聞きして、「泣き叫びたい念いがしていた」顧頡剛が「辛亥革命の後は、意気込み更に物凄く、天下に難事なし、最善の世界も誰かが提唱し出しさえすれば、立ちどころに実現し得るものと考へた^①」のはまさしく、彼らの心情を代表している。だが、待ち望んだ光明の訪れの時期は、その灯を打ち消し、歴史を逆行させようとする勢力の活動が始められる時期でもあつた。それ故に亦、それに対して、民主・共和を護る勢力の新しいあらがいが始められねばならない。李大釗が、「言治月刊」に論稿を書きつづけた時期、即ち、辛亥革命から第二革命に及ぶ時代の歴史的な特

徴は、民主・共和をめぐる、この両勢力のあらがいの諸過程に、典型的に見出される。ここで、この諸過程を詳しく述べる暇はないが、後論のため、次の過程にはふれておかなばならない。

多分、辛亥革命のあと、抗州駐在英國領事は、西商が、中国人に「機器」を売つたり、小借款を供与しようとする場合、絶対に、民間の中小実業家を相手にしてはならない。この連中との取引で、最近損害が続出している。必ず「政界の高官」に限つて取引すべきであるという意見を本國に書き送つている^②。西商から、「機器」を購入しようとする民間中小実業家の成長——これを援助せず排除しながら、巨大な反民主勢力——官僚資本と結合しようとする帝国主義の意図は、辛亥革命によつて、とどめられず、いな、一層大きな国家的規模で実行に移されようとしていた。早く、一〇年十一月一〇日、四國（米・英・独・仏）借款団を形成、清朝から、いわゆる湖広鉄道借款を獲得（一一・五・二〇調印）していた欧米列強——國際的巨大金融独占体は、他の二國（日・露）とともに、革命の勃発、その後の事態の推移に注視を怠らなかつた。「嚴正中立」を表面にかかけ、

南北和議（妥協）を指導しつつ、彼らの眼は、南北両勢力共通の致命的弱点の一つ、極端な財政難をみのがさない。たとえばその代表の一人、英国公使は、革命勃発の直後、南北両勢力が対峙段階にあつて、今後の事態の推移が、いまだ誰の眼にも、明らかでなかつた時期（一一・一一・六）、早くも、北方（清朝）が極端な財政難におち入つてゐることを本国に報告しながら、こうみ通していたのである。「中国の財政に対して、外国が管理を行わねばならない日の來るのは遠くない」と。さて中国側のこの弱点を利用し、彼らの独占利潤獲得を実現する最良の方法は、当面、借款を供与することであつた。だが、その供与対象として彼らは借款を切望してゐた南方（革命派を排除し、あくまで北方（袁一派）勢力を選ぶ。いな、彼らの意図に従順でなければ、南北妥協の体現として成立した、民国初代の唐紹儀内閣をも倒し、亦唐一派と結びつこうとした、中・小國際金融独占体（ベルギー、クリスプ兩借款団）をもはねとばすことも辞さない、はげしい方で、袁一派を選んだ。袁世凱の臨時大統領就任後一六日目という重大な日から、善後大借款の前貸の形で、五回に亘つて、一二一〇万兩の金が

供与されたのである。この前貸成立に尽力した米人顧問ストレート自身語つてゐるように「中国政府（もちろん袁政權）の急場を救い、紛擾と反乱とを防止せしめる」ために。そして、袁一派は、彼らのみに与えられた絶大な援助と期待に答えるため、有効に働くその前貸金の大部分を「革命軍隊解散費」にふり向けたのである。これまで借款に反対するどころか、むしろ自身も得たいと切望してゐた南方革命派も、かか事態の推移に直面、はげしい反対運動を展開した。一つは、それが袁一派勢力を強化することが彼らの眼にも明らかであつたし、同時に亦、前貸の条件として、同借款団が類似借款の優占権を主張し、借款金の使途と担保物件（主として塩稅）とに對する、前例のない程強力な外人の管理、監督権が付せられており、民族的矛盾の激化せしめられることが、明らかだつたからである。實際、これらの条件は、革命後袁一派を支持しつづけた上海商會のメンバーさえ、その緩和を英国外相に要請し、後に——正式成立のとき——アメリカ大統領ウイルソンさえ「中国の財政上、否、政治上の問題に無理に干渉するかもしれない」と反対した程のものであつたのである。国内のはげしい反対

と、帝國主義列強間の矛盾の激化^⑧によつて、この善後大借款の成立は、ほぼ一年近くも、引きのばされたけれども、ついに、一三年四月二七日成立する。調印場所に出かけて反対しつづけた国民党代表達に対して、北京軍警に守られながら、夜明けの三時という異常な時間に、あわただしく調印が強行されたのである。所で、一三年四月と云えば、正式国会（参・衆両院）が開かれた時であり、前年末から同年はじめにかけて行われた総選挙において、国民党（一二・八・成立）勢力が、絶対過半数を占め、責任内閣制と議會政治の貫徹をめざして、きおいたつていた時でもあつた。^⑨所で、随時、軍閥的な暴力で政敵を脅かし、暗殺しつづつても、議會勢力を固めるため、先づ六政団を合併して共和党を結成し（一二・五・二五）、^⑩同盟会の国民党への拡大に対抗して、梁啓超ら旧立憲派を中心に民主党を作らせ（一二・一〇）、^⑪一三年の正式国会開会に備えて、更に、保守大合同（進歩党の結成、一三五・二九・成立）を進めつつ、国民党勢力を分裂させるため、その不健全分子を買収、小政党を分立させるなど、^⑫国会対策を進めていた袁一派にとつて、国民党が正式国会の過半数を占めたことは一つの政治的危機

でもあつた。この政治的危機を打開するため、当時の国民党の事実上の指導者宋教仁の暗殺（一三・三・二〇）をも強行していた彼らにとつて、大借款の成立が、いかに大きい支えとなつたかは見易いところであろう。と同時に、政党にとつて生命とも云うべき綱領を後退させ、民衆との結合を一層狭くしても、黨員をふやし、国会と内閣に多数の代表を送ることが、民主政治を実現させる途だという幻想にとりつかれていた孫文一派も、^⑬袁勢力の宋教仁暗殺につぐ、大借款の成立によつて、自ら危地に追いやられたことを漸く自覚せずにはいられなかつた。孫文は「外国の金融業者」の北京政府の援助は「中国の統一と平和」を破り、「不幸なる内戦を激化さるものである」ことを、外国の国民と政府に宣言した（一三・五・六）。国内でも、借款によつて国を亡ぼすよりは、一家の困苦をしのんで、国民捐を寄せられたいと、各方面に悲壯な訴え文を發し、^⑭華中・華南の拠点の兵備をも固めようとした。だが、袁世凱は、右の、孫文の宣言より三日早く、国民党こそ、「良民を魚肉し」「平和を擾乱し、民国を破壊する」不逞の輩であり、中央への反抗をやめぬ限り、断固用兵討伐するという教令を發して

いた。³³⁾ 袁一派を盛り立てることによつて「擾乱と反乱」とを防止しようとしたストリート達の、独占利潤追求行動は、その意図とは逆に、「擾乱と反乱」を深め、具現させる。当時の歴史的条件下で、国民党勢力にとつて「絶望的」な、袁一派にとつて、帝制運動の端を開いた、流血の第二革命が勃発したのである（二三・七一九）。

さて、右の如き二勢力の政争をはらんで、国内的、民族的諸矛盾が激化しつつあつた時——一三年の春、李大剣は天津北洋法政専門学堂を卒業、ただちに、友人達と北洋法政学会の結成とその月刊機関誌「言治」創刊とに参与し、むしろ、友人郁嶷とともに、それらの指導的役割を果してゐた。³⁴⁾ 事実、二十五歳の彼は、郁嶷とならんで、同年四月の

正式国会開会を記念して無事創刊された「言治月刊」の編輯部長という要職につき、³⁵⁾ 且つ自らも、同誌第一期（二三・四・一）——第四期（二三・九・一）の約五ヶ月の間に、翻訳一つ、詩七篇、論稿一五^{*}を發表している。これは、同期間中、同誌に投稿した三〇余名の中で、郁嶷（二三篇）に匹敵する多量のものであり、編輯部長というその地位からみても、若々しいインテリとして、十分に精力的なスタートを切つたと云わねばならぬ。

では、当時の彼は、どう云う問題を、どのようにとらえ、どう云う主張を書きつづけたのだろうか。インテリとしての彼の右の積極的な活動を支えた問題は一体、どのようなものであつたのだろうか。

* 「言治月刊」（第一—第四期）李大剣著作目録

〔論稿名〕	「言治月刊」号数	発刊年月日	著作年月	備考
1 「隱憂篇」	第三期	一三・六・一	一二・六	
2 「大哀篇」	第一期	一三・四・一	不明	
3 「彈劾用語之解紛」	〃	〃	〃	
4 「托爾泰主義之綱領」	〃	〃	〃	（翻訳）
5 「筑声劍影廬紀叢」——「朱舜水之海天鴻爪」	〃	〃	〃	
6 「更名龜年小啓」	〃	〃	〃	（詩二篇を含む）

7	「暗殺と群徳」	第二期	一三・五・一	〃
8	「筑声(劍影屢紀叢)——東瀛人士關於舜水事蹟之爭訟」	〃	〃	〃
9	「覆景君函」	〃	〃	〃
10	「裁都督橫議」	第三期	一三・六・一	〃
11	「論民権之旁落」	〃	〃	〃
12	「題蔣衛平遺像」	〃	〃	〃
13	「原殺——暗殺と自殺」	第四期	一三・九・一	〃
14	「論官僚主義」	〃	〃	〃
15	「一院制と二院制」	〃	〃	〃
16	「政客之趣味」	〃	〃	〃
17	「是非篇」	〃	〃	〃
18	「登樓雜感」戊申	〃	〃	一九〇八? (詩二篇)
19	「哭蔣衛平」辛亥	〃	〃	一九一一? (詩一篇)

なお、前掲(註④)張氏「著作年表」文操氏「遺著繫年目錄」によれば、本誌第六期に「文叢」「游碣石山雜記」の二篇を發表しているが未見。

三、李大釗の出差

1、歴史的課題との対決

一二年六月——北洋法政専門学堂の学生時代に、そして恐らく、本期の最初に——書かれた「隱憂篇」の中で、彼は「匪氣」にふれて、こう述べている。中国歴朝の興亡は、必ず、支配者の失政に対する「民怨」——「匪乱」を、「梟

雄」が利用しつつ、「帝王事業」を私図することに外ならなかつた。だが、「民国の興起」は独りそれと異り、「大義の用兵」によつたため、東西の歴史に例をみない速さで成功した。吾国と人民にとつて大幸だつたと云わねばならぬ。だが、諸種の原因によつて、今日なお、帝王事業の復活を計る動き、すなわち「匪氣」がある。「民国建設の進行」をなしとげるためには、この「匪氣」を廢除しなけ

(朱舜水の著作、事蹟に関する、景学鈴の投書への返事)

(詩一篇)

ればならないと。彼が、辛亥革命を、帝王支配に結果したこれまでの王朝交替とは別個の、歴史的なものであることを認識していたこと、亦、旧い形の「会党」運動と、それ

を利用しつつ、梟雄が帝王支配を復活することとに反対していたことは明らかである。「言治月刊」（以下「本誌」と略称）創刊号に發表した「大哀篇」の冒頭でも、「暴秦以降、民賊（専制主義者）迭起、……陵軋黜首、殘毀學術、……摧折人權、莫敢誰何、口謗腹誅、誅夷立至……伝襲至今、噫嘻悲哉、此君禍也」と叫んで、民衆を苦しめ、學問を殘毀し、一切の批判を庄殺しようとした秦代以後の専制主義を痛烈に批判しつつ、明確な「君禍論」を展開している。

更に、右の君禍論に引きつづいて——及び他の諸篇でも、一貫して——清朝打倒の革命運動に身命を捧げた人々を「殉国成仁、殺身救民之先烈」と讃えて限りない尊敬を寄せられている。亦、「竊冀我中華於東亞大陸、獨豎新政局之赤幟、絶不欲陳陳相因、随政客之唾沫、以噓致弗脱於歴史遺跡之縛絆」とも叫んでいること、「一院制与二院制」などを綜合すれば、彼も亦、当時の多くの良心的なインテリ達と同じく、辛亥革命によつてもたらされたものを「新政局の赤幟」と

して期待し、「歴史の重いきづな」を絶ち切ろうと切望していた一人であつたことは明らかである。

だが、彼は革命後の諸過程に、安閑と期待をかけつづけ得ただろうか。決してそうではない。今、その一部を引いた、本期の最初の二篇——「隱憂篇」と「大哀篇」——そのものが、その題名の示すごとく、民国の建設と發展を阻む諸原因、その根源についての、悲痛な論稿なのである。たとえば、前者——「隱憂篇」において、彼は「民国建設の進行を阻む」諸問題六つと、特に、大切な三要因をつかみ出す。即ち、六問題の第一は、英国の西藏に対する帝政ロシアの外蒙に対する侵略の拡大によつて、「領土が削りとられ、瓜分を招きつつある」という「辺患」。第二は、革命戦のため徵募された軍隊を解散し難く、軍餉に困るという「兵憂」。第三は、財源枯渇と借款未締結による「財困」。第四は、連年の水旱で、江南、河北に乞食が絶えない「食艱」。第五は、生産者—工・農が疲敝し、百業零落しつつある「業敝」。第六は、頑冥な政治が革められず、事繁なるにも拘らず人材が乏しい「才難」。この六問題が、民国の建設をおくらせている諸問題であり、将来に大憂

を賄さなため、創国のはじめに、処理せよと彼は主張する。だが、以上の六つは民国後にあらわれた問題であり、従来からあつて、而も最もかなめの大問題は「党私」「省私」「匪氣」の三つだと彼は考えた。「匪氣」とは既述した通りの問題だが、「党私」とはこうである。近代的な立憲国では政党は国に禍せざるのみか、政党間の政競が国政を發展させているのに、吾国の政党はかかる役割を果していない。逆に「意見を争つて政見を争わず」、その上「軍勢を仮つて、自党の勢力固めに」のみ熱中している。「将来の党争の時は即ち兵争の時」となるに違いない。第二の「省私」とは、各省都督問題を指す。即ち、清末から、各省都督の権力が次第に重くなつたが、辛亥革命によつて、独立した各省が夫々自省の都督を自奉するに及んで、全く割拠体制が形成された。やがて、「各省が儼たる異国」となり、このままでは中国は粉碎されるに違いないと。

見らるるように、本期の最初から、彼は、帝國主義的侵略から、国内の政治、経済、社会、軍事等々に及ぶ、広汎な、而もその一つ一つが質的に極めて重大な諸問題をつかみ出し、民国建設の前途を憂えているのである。吾々は、

祖国の将来を「洋々たる大海に乗り出し、風雨狂濤にもまれながら、目的地に達し得ず、なお灘中に怖れおののいてゐる」破れ舟にたとえて、「隱憂篇」を書きつづつた、青年李大釗の心情をくみとるべきであらう。云い換えれば、彼は一方で、辛亥革命の歴史的意義を明確に認識し、東アジヤの中で、中国においてこそ「新政局の赤幟」を打ち樹てたいと念願しながら、同時にその願望が、きびしく崩されねばならぬ現実を、悲壯な思ひで凝視し、併せてその暗い現実をもたらした根源をさぐるうとしていたのである。問題の根源はどこにあるか、その解決にはどうすべきであるかというのが、彼の特徴的な発想法であるが、まさしく、歴史的な課題そのものに対決しようとしていたと云つてよいだろう。だがこの対決は、直線的に問題の本質に迫るものでなく、矛盾にみちたものであつた。

2、国民党勢力との対決―擁護的側面

先づ、注目すべき特徴点は、「新政局」の發展を阻み、革命の成果を奪ひ、共和の幸福を破壊し、民衆を塗炭の苦しみにおとし入れている根源の勢力として、彼が最も精神的に対決したのが、国民党系勢力だつたという事である。

すべてに「隱憂篇」で、「政党」と「都督」を最も重視して
いた彼は、「大哀篇」で一層明白に、その主張を展開する。

「君禍論」と革命の先烈への讚美を記した直後、「これら先
烈の血券・肉屑を拾い、其の面を塗飾して傲岸自雄」して
いる勢力を彼は剔抉する。ところでその勢力とは、袁世凱
一派でなく、「旧時の党人」又は「首義將士」を擁戴して
いる「政党」であり、亦、革命の功勞によつて、勲位と勲
章や「上將・中將」などの頭位を獲、重兵を擁する武人達、
就中、「中央（袁政權）に抗する」都督達だと彼は主張する。
云うまでもなく、組上にのぼされているのは、国民党と同
系の都督に外ならない。そして、この勢力に対する彼の批
判は痛烈を極める。

「政党には穩健・急進・折衷の三派があり、いずれも、人
民を幸福にしてやるといふ綱領をかかっているが、結局、
夫々狡猾万惡の官僚、蠻横躁妄の暴徒、及び兩者の隙を伺
つて利益の分け前にあずかろうとする輩の集り（烏合の衆）
にすぎない。もし彼らが政權をとれば、吾国は必ず亡び、
人民は一人の生存者もなくなるに違いない」「彼らが華衣
美食……酒池肉林の中で、結納しつゝ浪費している金は

一体誰の脂膏か。貪濁無恥、坐して千金を擁し、選挙票を
賄買しているその金は一体誰の血髓か」「自分達こそ百姓
の代表であり、お前達の苦しみから解放してやるぞと自称
しているが、我々百姓を欺くものだ。丸々肥つているのは
彼らであり、瘠せ細つているのは吾々百姓なのだ」「現在
の政党とは、吾々小民の骨を敲き、髓を吸うものに過ぎな
い」而もこの政党は明らかに、「中央に抗する」都督につ
ながつている。いや、彼らこそ万惡政党のバックであり、
その支配も、民衆の幸福をふみにじる点で、政党と変りは
ない。「彼らは上、中央（袁権力）に抗し、下、人民を脅か
し、中央や人民を眼中におかない横暴を働く。革命前の吾
々の患は一専制君主にあつたが、革命後は、数十の専制都
督にある。……その権力が一省に集中されているだけ、君
主に倍する淫威を發揮し、民衆の苦しみは以前より大きい。
これが民権民権と呼称している彼らの実態である」かかる
政党・都督支配によつて各層の人民——農・工・商民は皆
夫々の生業を失し、「蕩折離居して、溝洫に転死し、屍骸
が野ざらしにされる」——という惨状に追いこまれている。
かく痛憤しつゝ、彼らへのはげしい怒りをこゝう結論づける。

「彼らの口にする人民のための政治とは、豪暴狡猾者の専制であり、人民自身の政治ではない。民権とは少数豪暴狡猾者の窃権であり、人民が自力でかちとつた権利ではない。幸福とは彼らが掠奪した彼らだけの幸福であり、人民自身が安享する幸福ではない。……私は吾民の所を失せるを哀しむのみだ」と。因みに彼はこの「大哀篇」の続編を書き続ける予定だつたらしく、(一)哀吾民之失所也という表題をつけている。(傍点原文のまま)

当時、彼と共に、北洋法政学会と本誌の指導的メンバーであつた郁嶷は、「法理漕粕の学にとらわれている」他の同人達に較べて、李大釗の特色が、「感慨悲歌」し、且つ、「専ら民生を念とした」ところにあると、描写している。このとらえ方が、その限りで全く正しいことは、今引いた彼自身の文章だけでも明らかであろう。彼の国民党勢力批判の内容と方法が、あくまでも、人民・百姓・小民の立場から、これらの階層・階級の「幸福」「権利」をふみにじり、「利祿」と「政権争い」に憂き身をやつして「民生を傲る」所の憎むべき勢力として対決しようとするものだからである。確かに彼は、本期の当初からかかる立場

——以下「小民的立場」という言葉で総括するが——に立つて、歴史的課題に対決しようとしている。だが、彼が、郁嶷がとらえていない、他の側面を、それと同時に内包していたことを、みのがしてはなるまい。即ち、民国の建設を阻み、人民を苦しめる勢力として、袁世凱一派とその背後勢力(欧米帝国主義)に関しては、全くふれようとしていないということである。

そして、かかる意味を濃厚にはらむ国民党勢力批判は、本誌第三期(一三年六月一日発表)の二つの論稿において、一層明瞭に示される。

「梟雄の桀(袁世凱)は風雲を掉弄することに習熟し……その拳動はつねに法の範圍を逸脱する。だが、風馳り雲擾ぐ今日、群麴(国民党)を震伏せ、残局を收拾するためには、この梟雄にのみ頼らざるを得ないのである」「梟雄を禍根とみて、これを疑い、それを防ごうとするのは当然だが、……彼に取つて代ろうとする勢力は、個人であれ機関であれ、果して人民に信頼されるであろうか。……北京軍警の政治干渉を防ごうとすることは聞く。だが各省都督の跋扈を防ごうとすることは聞いたことがない。總統政府の専制

を防ぐとすることは聞く。だが、議会の専制を妨ぐようとするのは曾つて開いたことではないのである。……一体議會は總統政府より賢明だと云うのか。だが、總統も議員と同様に民選によつて産れたものであり、政府も議會と同じく國家の機關なのである」（以上「論民權之旁落」）。同じ号の「裁都督橫議」の主旨も同様であり、否、一層、詳細且つ具體的である。——違憲者は總統でなく都督である。中央でなく地方である。彼らは政・財・軍權を掌握し、儼然たる聯邦君主に等しい。自由に借款し、自由に加賦し、人民の血肉をしぼりとつて、政党財政を助け、乱絲の如き今日の政情の根源は彼らにある。他方、彼らは、政府の稅吏を公然と追つぱらつて、中央に抗しつゝ、国内に敵國を形成している。皖（安徽）・贛（江西）・湘（湖南）・粵（廣東）各省——いずれも国民党勢力の有力な地盤地域——都督の「叛心」は、宋教仁暗殺事件や、大借款問題に始まつたのではないのである。——而も彼は、正式政府成立の時期に、都督制を全廢してその軍政權を中央に集回し、政府から各省尹（長官）を任命し、全國を五軍区に分つとともに全國的に警察を整備せよという詳細・且つ具體的な中央集權策を

主張する。かくすることによつて「憲法を擁護し」「國權を鞏固にし」「民權を伸張し」「吏治を整頓する」ことが出来ると考えていたのである。

而も、重ねて云えば、国民党勢力を排除しつゝ、袁一派のみを支持し、産れたばかりの民主・共和国の民主的発展と統一を防げた強力な指導勢力——欧米帝國主義についてもふれる所がない——むしろ逆に、彼は両者の結合を典型的に象徴した「大借款」を、國家財政の危機を救うものとして歓迎さえしているのである。因みに、本誌の編輯部員をつとめた莫禦の書いた第三期の「国外記事」は、一層あらわに、大借款を「財政救済の良法」と記してこれを大歓迎するだけでなく、大借款反對運動こそ、「拳國上下」の期待の実現を防げ、且つ、国内の政争と内戦とを導き出す要因だと主張している。

ところで、李大釗が、「大哀篇」「論民權之旁落」「裁都督橫議」の諸篇を發表した、一三年四月—六月の時期とは、既に見た通り、正式國會開会の時期、而も、議會の絶対過半数を国民党勢力ににぎられて、袁一派の政治的危機が深まり、この危機を切りぬけるため、かれらが国民党の事実上の

指導者宋教仁の暗殺に引きつづき、大借款の調印を強行、更に、明確な反袁共和主義者徐宝山をも暗殺（一三・五・二四—後述）、一方的に国民党を論難する教令を発して、内戦準備に血道をあげていた重大な時期であつた。彼らに抵抗する国会議員が夜な夜な北京からひそかに消し去られ、恐怖政治が中国を蔽おうとしていた時期であつた。かかる時、袁世凱を民選總統とよび、彼に頼つて結局を收拾せざるを得ない主張し、北京軍警と対比して国民党勢力の「叛心」を悲憤し、更に、袁一派の権力をそのままにして、その中央集権の強化を主張した、李大釗の現実把握のし方は、民主・共和をめぐるあらゆる両勢力の中、袁一派を一方的に擁護するという客観的役割をになうものと云わざるを得ない^②。他方、民主・共和の發展を阻む、袁一派の背後勢力と、その両者の結合によつて導き出される中国の矛盾の深化をとらえることなく、むしろ両者の結合の端的なあらわれである大借款を歓迎するところえ方——いな、彼が部長をつとめた編輯部のメンバーが、公然と、大借款反対運動を、政争——内乱に導く根本的要因と記していたこと、これらは、今少し検討すべき問題を吾々に提起している。

青年李大釗が、きわめてエネルギーに、インテリとしての諸実践——思索、執筆・編輯・刊行——を開始した、その母体、北洋法政学会と「言治月刊」の、更にその母体たる北洋法政専門学堂とは、一九〇七年（前清光緒丁未年）、袁世凱を頂点とする北洋軍閥によつて、彼らの拠点・天津に創設された学校である。彼が、基本的な生活資料をどこからどのように得ていたか、その経済的基盤は不明であるが、少くとも、若いインテリとしての諸実践が、袁系のインテリ集団・組織の内部で、而もその幹部的要員として行われたことは、ほぼ間違いない所であろう。さらに、本誌（第一—四期）全体を考察してみると、「不偏不党」をモットーとしながらも、そこに発表された諸論稿（三名を越える人々の百三十余篇）^③の殆んどが、一方的に国民党勢力を論難し、国会議員と対比的に袁一派の集権を主張していることが知られる^④。郁嶽と李大釗について、多教の論稿を掲載している白堅武の如きは、公然と主権在民説を否定し、国家大権論を唱え、革命即亡国論を展開することによつて、袁政権代弁者の役割を果しているのである^⑤。以上のことは亦、李大釗個人が擁護袁性を濃厚に持つ論稿を執

筆・發表しただけでなく、彼が毎号、約四千部發行の本誌の編輯部長として、多数の擁衰論を、一層大規模に編輯・發刊し社會化したことを意味する。單純・直線的に、「戰鬪的民主主義者」と規定づけるには、余りにもかけ離れた所から——むしろ、インテリとしての諸実践の基盤を、衰系研究者集団におき、その幹部要員であつたところから李大剣は出發したのである。

3、矛盾——摸索

では、右の如き擁衰的政論が、当時の彼の本領であつたらうか。彼は全き擁衰論者であり、インテリとして彼の活動をきびしく制約しようとする基盤に、何らの不安も感ぜず、そこに安住していたのだろうか。民国の建設を阻み、民衆を不幸におとし入れる根源に対する彼の意欲的な癡視・思索はひたすら、国民党勢力への論難にのみ注がれていたのだろうか。

先に彼の擁衰性を最もあらわに示すものとして引いた「裁都督横議」をもう一度考察してみよう。その篇末で、彼は本篇の結末をこうつけている。——私が、どうしても、都督を廢さねばならぬと主張する理由はどこにあるか。私

は次の諸問題をひそかに考えたのである。中央の命令が何故行われないのか。地方の乱機が何故おさまらないのか。

民生の幸福が何故享有出来ないのか。国家財政は何故紊乱するのか。中国人同志が何故戈をとりて相争わねばならないのか。これらの私の疑問の根源を追究してみるとどうしても都督がその根源だと云わざるを得ないのである。先に、満清の暴政に対して痛哭流涕・慷慨激昂して、革命運動を行ひ、光復の偉業を建てた人々が、今日何と愚な人々になつたことか。だが、現在吾が國勢の危きことは、前清に倍しているのだ。蒙・藏（蒙古・西藏）が離異し、外患は日々に亟かであり、財政の危機亦救い難い。もし、吾国の指導者達（雄長）が手を握り、力を併せて救國の対策を樹てないと、四千年の歴史を誇る吾が民族は、波蘭・印度・朝鮮と同じく永久に外人の奴隸となるにきまつている。当局の諸公よ。四億同胞のために雍容揖讓されたいと。

これを要約して云えば、彼の念願は、あくまで、外國の侵略と支配を受けない、国内戦争の起らない、民生（人民の生活）の豊かな、平和で明るい統一された祖國の建設におかれていたのである。「大哀篇」が、人民自身の力によ

る政治、人民自身のかちとる民権、人民自身が安享する豊

かて幸福な生活の実現を念願する視角——私のいわゆる小
民的立場から書かれたことと、全く共通の意図に根ざして
いる。それ故に亦、国民党勢力に対比しつつ、袁世凱は民
選の大総統だ、彼に頼つて混乱した国情を收拾せよと主張
した「論民権之旁落」においても、その結論的部分で、こ
う記されるのである。——一般に「権」とは本来的に実力
を備えねばならない。民権もそうであつて、不動の民権を
実現するためには、それにふさわしい能力を人民自身が身
に備えねばならぬ。天秤で物を計る際、計られる左右の物
体の重力間に些少の狂いがあつても、天秤が天秤の用を為
さないと同様、民権も人民自身がそれにふさわしいだけの
実力を具有しないと真の民権確立は不可能なのだ。今日、
民権が衰退している根本的原因是、人民自身に民権を荷う
能力がかけているからであると。そして、国民党勢力を震
伏させるためには、袁世凱に頼らざるを得ないと論じられ
た本篇の結論として、彼は、右の意味での人民自身の能力
の養成のため、政権争奪と革命のために奔走している国民
党勢力に対してその精神と魂力を「国民教育」の振興にむ

けよと要請するのである。

云い換えれば、彼の擁護性を端的に示す諸篇の、真に目
ざすところは、いずれも、単なる国民党勢力批判にあるの
でもなければ、亦、専ら国民党勢力に対して袁一派勢力を
擁護するところにあるのでもなくて、あくまで、平和で獨
立的な而も真の民生・民権に基づく統一民国の建設におか
れていたのである。そこには、私のいわゆる小民的立場に
立とうとする明確な意欲と前進的な摸索がある。インテリ
としての彼の諸活動を、その根柢から規制しようとする彼
の生活基盤(袁系研究者集団)にあらがい、そこからぬけ出
そうとする意欲と思索と摸索がある。支配階級||袁一派の
立場に徹し切れず、他方袁一派の当面の最大の反対陣営||
国民党勢力をも、はげしく批判し、従つてこの両勢力のい
ずれにも安住し、納得し得ないで、新しい小民的立場を
築こうとする意欲的な摸索がある。だが、彼自身の心の奥
底からのこの意図、念願、摸索的諸実践にも拘らず、これ
らの諸篇の客観的に果す役割が、擁護的(買弁的反民族的反
民主的革命的)な意義を荷わざるを得なかつたことは、既
述した通りである。彼の崇高で熱烈な主観的意欲、それに

基づく摸索的な諸実践——思索・執筆・發表・学会活動・編輯・

發刊等々——と、それらの諸活動の産み出す客観的な諸結果（役割）との間に、根本的な矛盾・対立がある。それは、擁護的側面にあらがひ、それを克服する新らしい小民的立場を築こうと一步ふみ出しつつ、なお克服されない、そのような矛盾、従つて矛盾の主要な側面がなお前者、即ち雍衰性にあつたと云つてもよいだろう。右の意味での、矛盾・相刺は、彼の国内諸階層把握のし方、或いは諸現実把握のし方に、様々な色彩と特色を産み出す。「大哀篇」その他の諸篇で、あれ程、小民・百姓・黔庶・農・工・商の幸福と豊かな生活の建設を念願し企図しながら、「愚民共和の何物たるかを知らず」という形で、愚民觀が露呈されたのもそのあらわれであろう。擁護性が主要な側面を占めていた当時の段階では、彼が築こうとした小民的立場そのものが、民衆から游離した、いわば、上から教えようとする選良意識に蔽われざるを得なかつたのである。亦、郁嶷が、彼の特色としてつかんだ、彼の「感慨悲歌」的色彩も、小民的立場の確立が、容易にとげられない矛盾と苦惱から産み出されたのであろう。彼の次の様な現実把握の混乱、混迷

も亦、同じところに根ざしていると思う。

「大哀篇」で、暴秦以来の「独夫」の専制支配とその下の人民の疾苦を痛憤して明確な「君禍論」を展開した同じ彼が、僅か二ヶ月後發表の「裁都督横議」では「中国の国体（の特徴）は有徳者が王になることであり、後世の独夫が継承したのは、單なる専制の形であつて、聴訟・徼租以外は、一切人民に干渉を加えなかつた。胡元・滿清でさえ人民の安平を侵擾したことがない」と主張しているのである。専制主義支配の歴史に対する全く相反する、何と混乱した把握のし方であろう。辛亥革命後の現状分析、及び情勢の發展——彼自身の言葉によると「進行方略」——の把握も同様に混迷を露呈している。「裁都督横議」では、革命後の情勢の發展を、第一期、軍法時代（武昌起義——南京政府成立）、第二期、約法期（臨時約法制定——憲法宣布）、第三期、憲法時代（憲法の実施期）の三段階に分ち、現在はずして憲法時代に入らうとしてしていると論じて、袁一派治下での共和政治の發展を確認する。しかるに、同じ号に發表した「論民権之旁落」ではこう述べられるのである。「清末には浪のように湧き上る民権の声を聞けば、爽快の感を覚えずに

はいられなかつた。だが、今日では、民権、民権の声をきけば、かえつて隱痛・慘苦、聞くに忍びない。；吾國黔庶の彫喪頹廢は著しく、たとい堯・舜・ワシントンが再生しても、真正共和の隆治はとげ難い」と。樂觀的な共和發展論と、それに全く相反する共和未成熟論とが同じ号に相ならんで展開されているのである。同一人の見解かどうか疑わしい程の混迷である。而も革命後の共和政治の現状、その發展方向という彼にとつての基本的問題において、かかる混迷が露呈されているのである。

だが、右のような深い彼の混迷から、次のことがくみとれるし、亦、くみとらねばならない。袁系研究者集團の幹部であつた彼が、右の如き重要な問題の把握において、混迷し、動搖していること自体、彼が擁護的立場と思想に徹し、そこに安住し得ず、ひたすら新しい立場の確立をめざして、摸索を深めようとしていた証左であるということである。事実、そのことは同じ時期の他の諸篇において、明確に示されている。

袁一派の本質を露呈した宋教仁暗殺問題を彼はとり上げずにはおかなかつた。そして、暗殺の根本原因を追究し、

「群徳(社会道德)の衰え」が、宋を殺した窮極的原因である。それ故、社会道德の振興が、今日の急務だと主張している(「暗殺与群徳」)——ここでも、宋を暗殺した袁一派勢力の別扱、その権力機構との対決が避けられているように見える。だが、ここで、彼は、清末革命の志士達の敢行した暗殺と袁一派のそれとを対比し、前者は、群徳の向上期における暗殺であつたから、社会を進歩させ、「民国方興の運を開く」という役割を果した。だが群徳の衰えている今日の暗殺は、「盜賊」的行為であつて、その害毒は「洪水猛兽よりも甚しく」、許すべからざる行為であると痛憤しているのである。袁治下の社会が、暗殺者をして英雄たらしめず、逆に盜賊たらしむる、暗い社会だと断じてもいるのである。いわば、間接的な、しかし深い袁一派の批判論として評価されねばならない。而も、本篇の末尾で、彼は、宋を、南北の統一に奔走し、生民が、自己の利益のために絶大な期待をかけたところの得難い人物だと讃え、その不幸なる死を心から哀惜しているのである。袁世凱が、最も憎悪し、暗殺せしめた人物を、このように讃え、その死をかく哀惜していること——それは、あらわではないが、痛

烈な袁世凱批判論である。袁世凱に期待し、その下での統一を幻想していたその同じ彼が、かかる形で、袁批判論を展開したことは、袁一派の本質を露呈した暗殺行為への凝視を通じて、彼がその幻想からぬけ出そうと摸索していたことを意味するであろう。大きく云えば、彼自身の立つ主要な側面へのあらがいが、一層深く実践に移されようとしていたと考えられる。そして、かゝる意味での前進的摸索は、同じ時期にひそかにつづけられていたのである。

4、朱舜水とトルストイ

一九一二年六月二日は朱舜水の没後、二百五十年に当り、日本で盛大な記念祭典が挙行されたが、中国でも、杭州に会員数百人を擁する「舜水学社」が結成され、種々の記念事業が計劃された。浙江省議会在、専祠の設立、祀典への列入を決議した程であつたが、同学社の中心メンバーでさえ、舜水の著述や事蹟がつかめず、李大釗に質問書を送っている。

質問を受ける程、彼は舜水の文集・全集を読み、その研究に専心していたのである。舜水のどこが彼を魅了し、舜水から彼は何をくみとろうとしていたのか。舜水に関する

彼の三つの論稿^①の力点は、日本人が舜水を単なる「道学者」とみたり、「勤王」精神の振興者という「一面」だけを強調したり、とくに、稲葉君山博士のように公然と「帰化人」視する、そのようなとらえ方への批判にあつた。彼は、舜水の安東省菴あての七十通の手紙、その他の史料に依拠して、右の日本人の諸説を、たたくかけるように反駁する。――

先生は徒らに「性命を高談し、太極・無極を論争」した当時の儒学者流をきびしく批判していた実践的な学者であつた。而もその実践たるや、反満興明の、烈々たる愛国熱情に支えられてゐる。山鹿素行に築城術を問ひ、平生から日本の築城術に不断の注視を怠らなかつた。ひそかに三千金を貯え、機会をみて「再拳の雄懷」に備えてもいた。光圀のすすめてはるばる長崎に呼びよせた愛孫が、幕府の法禁で東上出来ず、僅かに、書信によつて、四十年ぶりに旧友家族の安否を問ひ得たという悲痛な状態にあつたとき、先生が、たとい農、漁、手工業で自食するとも、断じて清官になるなと孫を戒めてゐるではないか。生前、自分の棺を自製し、門人達に、将来、「逆虜敗亡の日」に子孫が自分の遺骸を引き取りに来るかもしれぬ。その日に備えて、朽ちない棺を作つ

ておくのだと語つた先生の心情はどうか。舜水先生は「日々向郷関泣血、無時不北望切齒」つた救国の学者なのであつて、そこにこそ先生の本質がある。道学者観は誤つており、勤王精神振興論者は先生の一面をみているにすぎない。帰化人説に至つては先生を誣うるものだと。——この説そのものの正否は、専門家の教示を仰ぎたいが、吾々にとつては、舜水研究に發露した、李大釗自身の姿、即ち、學問を、救国・愛国の途に密着させたいと念願・摸索していた彼の在り方が大事であらう。彼が、この三篇の文章を發表してから、数ヶ月後に、この精神を實行に移し、明確な「問學」の自覚と、「救国」の理想をもつて、舜水終焉の地・日本に留學する過程、及び、日本到着後の最初の彼の論文の中で、舜水研究が見事に生かされることは、後にふれるが、ここでは、擁衰政論を發表しつづつあつた同じ時に、後の李大釗がひそかに準備されていたことを述べておこう。亦、彼が、これより少し先、中島端の著書「支那分割の運命」を「包蔵禍心……横誣醜詆……歎動天下之耳目而速慘禍」と痛烈に批判し、「支那分割之命運駁議」と題して、翻訳・出版していたことも極めて重大であるが、それに就

ては後の研究にまちなたい。

さて、祖国の先人を研究しつづつあつた彼は、亦、異國の先覚、トルストイによつて視野を深め抜けていた。中里弥之助原著の翻訳「托爾斯泰主義之綱領」がそれを示している。本書から、彼は「現在の文明が、淫樂、虚榮にふける少数上流階級と、窮し餓えている多数下層階級との対立の上に築かれたものであり、国家が嚴罰を以て人民に戦争を強制し、科学進歩の成果が、悪魔の手に握られ、多数の下層階級が餓死し、殺されていること」「従つて革命は必ずであること」「労働が最大の善であるにも拘らず、労働者が、きびしい痛苦にさらされているのは、彼らの労働を掠奪（搾取）する者と奸悪の國家がある結果であること」だが「革命の真義は悔改という一語以外には示されないこと」などを學んだのである。彼が、中里氏の原著が、トルストイ主義の結晶を伝えるものだという前書を附して、一般の闕読を奨めていること、亦「大哀篇」その他における、民衆の疾苦、それをもたらす勢力へのはげしいヒューマニステイックな彼の憤りなどを想い合せれば、当時の彼が、強くとルストイ主義に惹かれていたことは間違いないと

ころであらう。むしろ、「大哀篇」などに発露した、あの小民的視角が、トルストイへの共鳴を呼び、その共感を通じて、一層小民的視角が深められたと云つた方がよい。因みに、「言治」期の彼は、欧米近代的思想に対して、とり立てて論ずる程の興味を示さず、そこから殆んど継承しなかつたと思われる。舜水研究が示すように、或いは「弾劾」(Impeachment) という近代政治学・法学上の用語を解釈するのにも、後漢書の史弼伝・范滂伝や説文を引いたりしているように(「弾劾用語之解紛」)、いな、やたらに欧米の諸制度に追随するなど云い(「一院制与二院制」)、或いは、満清三百年を通じて人心にしみわたつた官僚主義を根本的に払拭するために、中国昔人の議論を、決して陳腐な論として捨ててはならない、却つて、それらから深く学べと積極的に主張しているように(「論官僚主義」)、むしろ中国先人の思想や政論から学ぼうとしていた面が強い。その彼が、多くの欧米人先覚の中から、とくにトルストイを選び出し、学ぼうとしたことの中に、彼の小民性と人間愛精神の強烈さを伺うことが出来る。そして、その後のきびしい中国の諸矛盾との対決の過程で、このトルストイ精神が生かされる。

次期—私のいわゆる「甲寅期」において。否、有名な「我的馬克斯主義觀」(「新青年」(六ノ二)を書いた時代において。だが、ここでは、次のことを重ねて強調しておきたい。自己の小民的精神と結合させながら、彼が、トルストイ主義を通じて、現代の社会と国家が、上・下の兩階級の対立の上に築かれており、従つて革命が必至であること、だが、革命の真義は悔改を通じてのみ実現が可能であることを明確に意識していたことである。

5、矛盾の深化——問學の自覚

擁衰的立場と思想を、十分に克服出来ないまま、しかし、克服への摸索をつづけ、同じ過程で、愛国・憂國的な思索とトルストイ主義への傾倒を深める——こうしたインテリとしての誠実な彼の実践はその思想的矛盾をますます拡大させずにはおかないのであるが、彼がそこに生きた中国の諸矛盾の深化そのものも、一層彼の思想的矛盾を拡大させて行く。

一二年六月執筆の「隱憂篇」を約一年後（本誌第三期—一三年六月一日刊）に発表した際、彼は次の如き後書きを附している。「……（執筆以来）迄今將及一紀、党争則日激日

厲、省界亦愈劇愈嚴、近宋案發生、借款事起、南北幾興兵戎、生民險遭塗炭、人心詭詐、暗殺流行、國士元勳、人各恐怖……」。更にその最後に、彼は「中国全体をながめてみるとまさに危機万状であり、今にして思えば、一年前、この隱憂篇を書いたときは、まだ太平の時代であつた。嗚呼」と書かねばならなかつたのである。僅か一年間に、「太平の時代」から「危機万状」への、祖国の情勢の急速な動き——そして、更にこの一ヶ月後には、彼が最も憂へ怖れていた事柄——「南北両勢力の内戦」と「生民塗炭の苦しきをもたらすもの」、即ち、第二革命が勃発したのである。

国内の平和と統一、その中の民主主義の發達、民権の伸張、人民の幸福を念願していた彼にとつて、第二革命は極めて大きいショックングな現実であつた(後述)。だが、祖国が、彼の希望に反して、「危機万状」であればある程、彼はますます現実を直視し、思索し、執筆しようとした。第二革命までの同質の矛盾を内包しながら、しかしその矛盾を深化拡大し、従つて次第に彼自身の思想の内容と方法を変貌させながら。

「言治月刊」は、この第二革命勃発をはさんで二ヶ月、

つまり、一三年七・八月を休刊し、第四期が發刊されたのは九月一日であつた。北洋法政学会は、この二ヶ月の停刊の原因が、編輯の實際業務を担当していた北洋法政専門學堂本科生の夏期休暇による帰省にあると公式に弁明している。^①李大釗(編輯部長)と同じようなショックを、他の同人達も受けたとすれば、第二革命の勃発が、この休刊の裏に介在するとも考えられるが、吾々のここでの問題は、第二革命勃発に象徴される中国の国内的民族的矛盾の深化過程における、李大釗の思想(現実把握)の内容と方法の変遷についてである。

先ず、彼は一方では依然として、国内の諸現実を客觀的に正しく洞察することなく袁一派の統治を容認・肯定する。いや、本誌第三期までの諸篇にあらわれた以上の、端的な肯定・容認ぶりを露呈する。即ち、彼は、衆參兩院制主張者に反対して、一院制を主張しつつこう断定するのだ。「中国の政治は昔から平民政治に近かつた。これは欧米の學者も公認するところであり、元來、吾国の社会にはとり立てて云うべき階級(対立)は無いのである。このことこそ、吾国が欧米諸國と大いに異なる点である。その上、今日

では共和が告成し、五族が平等となり、天賦人權論の面でも、決して欧米にひけをとらない」と（一院制与二院制）。中国は、歴史的に専制主義国ではなく、亦、今日では、實際政治の面でも、理論の面でも、共和が完成したと云うのである。第二革命がまさしく勃発しようとしている時期に、何という極端な、余りにも歴史と現実を無視した、現状肯定——袁政權容認論であることか!! 而も、同じ文章で、自分はいくまで一院制を主張するが、しかし、と彼は結論づける。「現在の吾国の普通程度の人民は、決してともに共和政治を語るに足りないもので、もし、直接普通選挙による一院制なら、私は自分の一院制論を犠牲にしても二院制を主張する。その方が、国体の前途に横たわる危険を、多少とも緩和出来るからである」と。国体（共和）を危険にとらえ得ず、現在の袁統治を容認する彼の視角は、「人民は共に共和を語るに足りない」という、選良意識と相互扶助的に共生していたのである。そして、これらの視角・意識は、「元来中国にはとりたてて云うべき階級（対立）はなかつた」という甘い階級観と、その根柢でつながつてい

るのである。

確かに、当時の中国の民衆は、李大釗らインテリとともに共和を語り得なかつたであろう。だが、それは、自然にそうなのでなく、事實は、階級支配が、それを強制していたのである。たとえば、人民の大多数を占めた農民——その中から、江蘇省呉江県震沢鎮の農民を考察してみよう。同鎮の農民の大半は、早くから地主の限らない階級的圧迫に堪えながら、副業として製糸を営み、民国後も、海關冊に「七里七経」と註記された上質の、極めて重要な輸出生産を行つていた。満清時代、彼らを直接「拘押・管朴」した国家的な支配・収奪機構の一つ、巡検使が、辛亥革命によつて廃され、明るい光が彼らの上にも輝いたかのように見えた。だが支配の弛緩を恐れた地主達は、ただちに、「同業公会」という彼らの階級的組織を作り、廃止された管の満清時代の「弓兵」（俗称「差役」）を再招集し、抵抗する農民をほうりこむ私牢「押田公所」を建てるなど、農民支配体制を復活・強化したのである。かくて、農民は強制的に佃戸にされ、高率小作料を負課され、ひとたび弓兵が農村にやつてくると「威焰薰天、逢物即擢、鷄犬皆空」と

いう暴圧を加えられ、佃戸となることを拒んだり、小作料納入を怠つた農民は一斉に「答朴」されて、「押田公所」に投げこまれた。その惨状は「室小而押者衆、有時之駢足立、身不得曲、糞穢狼藉、蟻蝨叢生、斃者時有聞……」であつたと云われる。これらは、辛亥革命後、各地の農民がなめねばならなかつた苦しみ、ほんの一端であらうが、当時の李大釗にとつては、農民に対するかかる階級支配は全く意識の外にあり、この階級支配―権力問題をぬきにして、「共に共和を語り得ない人民」を、たゞ、表面的抽象的にとらえていたに過ぎなかつたのである。彼が、第二革命の切迫―勃発の過程の「危機万状」と鋭く対決しようとし、内戦による「人民の塗炭の苦しみ」をしつかり頭の中に意識しつつも、同時に、天下太平、共和告成論を展開したのも、ここに根拠があつた。だが、階級支配―国家権力の問題を、外庄―民族問題と弁証法的に統一して、科学的に把握し得なかつたのは、李大釗一人にとどまらず、様々な形で、だが、民主主義の確立という共通の問題をめぐつて摸索し、闘いつづけていた、当時の中国人全体に通ずることであつた。むしろ問題は、その様な視角をもちながら、その中で、

前進的な新しい立場を確立しようとうとう摸索し、思索していたかにある。李大釗にあつては、「共和告成論」が、第二革命前に較べて一層極端にまで押し進められていた反面、それと矛盾し、対立する思索も、一層深められていたのである。

先づ、「原殺―暗殺与自殺」がそれを示している。「南北幾興兵戎……暗殺流行、国士元勳、人各恐怖」を、「危機万状」の一モメントとしてとらえていた彼は(前掲「願とが」)、その内戦の危機が迫つた五月二十四日、――欧米の「金融業者」が袁一派を助ける以上、吾々も抗戦に起たざるを得ないと孫文が世界に宣言し、袁も亦、断固、国民党系勢力を用兵討伐するという教令を發した直後――袁世凱一派が、明確な反袁共和論者であり、揚州駐在の国民党系武將であつた徐宝山を、補註① 卓劣な手段で暗殺したとき、再び、この暗殺の根本原因を追究せずにはいられなかつたのである。――清末、革命の先烈が、民権の挫折に抗して敢然と暗殺手段に訴えたのは、明らかに「不良政治」が原因である。革命後、その専制主義的不良政治は一掃された。にも拘らず、暗殺だけが一層熾烈なのは、専制主義的不良

政治の余波によるだけだ——やはり、袁一派の本質に迫ることは避けられて、不良政治一掃論が展開される。だが、その側面をもちつつ、同時に、同じ文章の中で、「不良政治は暴力に基づく。暗殺手段も暴力に基づく。世界の罪悪であることには変わりなく、真の幸福を産み出し得ないことも同様である。そのことを思わず、暗殺をくりかえすことの害は洪水猛獣よりも烈しい」そして「好生憎死、物之性也、愛平和疾残暴又人之情也」という人性論、平和論をにかけて袁一派の「不良政治」と対決しようとする。而も、本篇の主旨は、もう一つの所にすえられるのである。

清末——民初にかけて、新しい中国社会の建設をめざしつゝ、容易に達し得ないという深い苦悩の過程で、自ら生命を絶つインテリが続出した。反滿革命運動の主力になりつつあつた留日学生に対して、日・清両国家権力が協力して加えた圧力、即ち、一九〇五年のいわゆる留日学生取締規則問題を契機に、警世の念願をこめて大森海岸に投身自殺した陳天華、一九一一年、同盟会の黄花崗起義の失敗を殺した陳天華、一九一一年、同盟会の黄花崗起義の失敗を知つて、ロンドンで投身自殺した楊篤生らがそれであつた。陳・楊達を「愛國熱誠」の先輩として賞讃の眼で注視

していた李大釗は、民国後、保定軍官校長蔣方震^⑧はじめ多くの人々の自殺を見聞きして、この自殺の根本原因とそれをなくする方途について真剣にとりくんだのである。彼は先ず、「宇宙の万象が、人類精神の変化に影響するし方は、極めて複雑であり、測としてその主因のいずこにあるかを知り得ない」「蔣君の自殺は、彼一人に限れば、一時の憤激として簡単に理解出来るが、社会現象としてみれば、実に無量の社会的原因から起つてゐるのだ」と、社会現象の複雑さ、社会と個人の關係についての分析の困難さを自覚する。そこで、一応、1 模倣、2 激昂、3 厭倦、

4 絶望という人間の心理現象に自殺原因を措定するが、だが、再び、これらの心理を激発し、且つ、人間心理が対象としなければならぬ所の「万悪の社会現象」問題に帰りつく。そして、辛亥革命後の社会が「賄賂公行、廉恥喪尽し、士は学を知らず、官は職を守らず、強は弱をしいたげ、衆は寡に暴を加え……」という暗贖たる社会であることをためらわず剔抉し、「中国四千年の歴史中、社会の黒暗なること、今日程甚しいことはなかつた。不平から激昂へ、激昂から輕生へと自殺に走るのも当然ではないか」と

痛論して、自殺の根源を「現在の黒暗社会」に求める。而も、黒暗社会のその奥の根源は何にあるかを追究、ついに「政俗の不良」にたどりついて、鋭くえぐり進める。「満清の末期にはなお吾々には光復の希望と共和の希望とがあつた。それ故、圧迫が横来しても、吾々の前途には一縷の望みがあり、志を灰にせず、(専制の)毒苦に耐え忍ぶことが出来た。だが、革命後の現在では、吾々が理想としたあの光復の佳運、希望中の共和幸福はいささかも聞かれないのみならず、却つて政俗は日一日と卑汚になつて行く。傷心の士たるもの、痛憤の余り自殺せざるにいられようか。ああ、社会鬱塞し、人心の憤慨、ここに至つて極まつた」と。

では、万悪の社会、不良の政俗から導き出される暗殺と自殺をなくするにはどうしたらよいか。

暗殺盛行に対しては——「吾々は正義を發揮し、人道を擁護し、天地の常則を明示し、人類の本性を回復しなければならぬ」そしてこれらを実現するための根本は「吾々が皆心から吾々の罪惡を懺悔することだ」

自殺に対しても——「仏教では極樂を説き、基督教では天国を説くが、極樂も天国もそこに到達する途がない。：

；極樂・天国を、荒渺幽玄の世界に求めるよりは、むしろ各人が懺悔し、罪惡を滌濯せよ。かくすることによつて、極樂・天国をこの世に打ち樹て、いばらの途を坦途にし、世を救ひ人を救うとともに自らをも救うことが出来る」。

さて、以上の李大釗の論調から、吾々は多くの重要な問題をくみとることが出来る。

第一に、依然として根本的な矛盾が持ちこされていること。だが、その矛盾が一層深化拡大されていること。即ち、一方の極に、以前にもまして、客觀的眞実と余りにも乖離したし方で、「共和告成論」——袁一派統治の容認——その支配下の現状肯定が展開され、一方の極に、袁一派の本質を露呈した暗殺問題を通じて、その政治の不良が、以前より一層明確に認識され、自殺の根源としての「四千年來かつてなかつた程の黒暗社会」がありのままに洞察され、更にかつての共和と幸福の希望の一切をふみにじり、人心の憤慨ここにきわまらざるを得ない、その根源としての「政俗の不良」が凝視・剔抉・批判される。——、全く相反するこのとらえ方の矛盾が、も早や妥協、調和を許さない深刻さて露呈されているのである。擁護的側面にふみ切るか、

小民的側面にふみ切るか、二者択一のところまで、彼の思想的矛盾が深化していると云つてもよいだろう。

第二に、暗殺・自殺問題の追究の結論として導き出されたその解決方法——現実の社会的政治的諸矛盾を克服するし方が、「痛自懺悔」に総括されていることである。一見抽象的・観念的に見えるこの克服のし方の意味は、吾々にとつては、既に明らかであらう。それはトルストイ主義の「正義・人道の擁護」であり、その意味での「懺悔」なのだ。所で、この懺悔——悔改とは、上・下面階級の解き難い対立、そこから必然的に産み出される革命、だが、その革命の真義は悔改によつてのみ実現されると認識された、その懺悔なのである。それは、そのままでは、真の「革命」意識、即ち、階級闘争を通じての革命論には決して飛躍しないが、革命の必然を、感覚的に、だが明確に感じとりつつ、その前に迷い深くたちどまつたまま、きびしくも暗い中国の現状、危機万状の祖国の憂状を、ありのままに、真実の姿において凝視し、そこから、その社会、その祖国を前進させる、何らかの新しい方途をさぐつてゐる、彼自身の心の奥底からの叫びであるのだ。この「懺悔」論は、単なる抽

象論観念論でなく、亦、決して、現世に厭倦した絶望論でもない。亦、トルストイ主義の皮相な借用でもない。祖国の前進を切望しつつ、自殺して行つた先輩友人達と同じ心情に立つて、だがそこから一步、大きい歩みをふみ出さうとする李大釗の意欲的な姿勢、思索なのであり、而も、中国の現実に実践的にとりくむ過程で、摂取されたトルストイ主義なのだ。欧米帝国主義に支えられた袁一派の専制主義に、正義と人道の名をかかけて反逆し、自らの擁護的側面をたち切らうとする胸中の高鳴りを、広く世人に告白する、その様な懺悔でもあるだろう。

第三に、先に暗殺問題を取り上げたとき、社会道德の衰えに根源があると捉えた李大釗と違つて、——勿論、社会道德の問題を疎外するのでなく、それをも含めて——万惡の社会そのもの、更に万惡の社会を産み出す不良政俗そのものを根源として対決しつつ、而もその対決という実践の過程で、社会や政治と人間心理との関連、乃至社会や政治と個人のとるべき行動との関連の分析がいかに困難であるか、中国の社会現象政治過程がいかに複雑解き難いものであるかを、彼が明確に自覚したことである。そこには、客

四、「言治」決別——問学の旅へ

觀的現實を無視した「共和告成論」的思考方法、又は、国民党系勢力を廃除し、袁一派権力の下で中央集権を強化すれば、民権、国権が伸張されると云う甘い幻想的な思考方法、或いは、或るときは、「堯・舜・ワシントンが再生しても共和はとげ難い」と嘆じたかと思えば、すぐに又、共和発展説に逆転するといった、論理性のない、混迷した思考方法、——これらの彼自身の過去の思考方法に深い反省を加え、新しい、論理性のある学問——科学が、自分には必要なのだと自覚しつつある李大釗の姿がある。新しい思考方法の追究、問学への自覚がある。事実、彼は、当時袁一派との矛盾を鋭くし、自ら第二革命に参加、後に、第三革命への過程、及び、第三革命そのものの中心となつた勢力（政学系）の理論的指導者、章士釗を、「師友を兼ねる人物」と敬慕し、問学の手紙を書きつづけていたのである。袁系研究者集団の幹部、李大釗が、当時の段階での反

袁・討袁の政治的指導者章士釗に、^⑩問学の手紙を書いていたのである。李大釗が、新しい決意をし、それを実践に移す時期が迫っていたようだ。——果して、それは決意され、第二革命の後に実行される。

1、日本留学の決意と実行

彼の、この決意とその意味については、僚友郁嶽が、吾々に伝えてくる。

「法理糟粕の学にとらわれている他の言治同人達と違つて、常に感慨悲歌の篇を書き、専ら民生を念として来た李大釗君は、世道の頹下に対して、これまで蓄積した学問では不十分であることを自覚し（原文「君顧自視缺然不足所備」、日本に游学しようとしている。彼の目的は、専ら社会経済学を究め、民生凋敝の原因を研考し、強横を抑え、羸弱を扶ける方途を探究する所にある」^⑪）と。

「民生凋敝の原因を研究し、強横を抑え、弱者を扶ける」ために社会経済学を学ぶという明確な意識と目的をもつた留学の決意——これは、利禄と仕官のために、一時的に「言治」を離脱するという意味での留学では断じてない。この決意の裏には、「民生」を毎日に衰退させる国内の諸矛盾の激化に対して、これまでの自己の学問ではとうてい足りないという自覚がある。これまでの小民的意欲に基づくイ

ンテリとしての諸実践が、客観的な祖国の現実、その進行と乖離し、従つて、亦、彼の小民的な思索・執筆・編輯等々の諸活動と、それらが客観的に果す役割とが、根本的に分裂・対立せざるを得なかつた、あの彼の思想上の根本的矛盾に對する反省と自覚がある。同時にこの自覚は、「人民はともにも共和を語るに足りない」と断じた李大釗自らが、自分こそ現実の社会や政治を分析し、亦、弱者を扶けるには學問的に全く弱いのだと痛切に反省したことを意味し、従つて亦、自らの高踏的な選良意識の大きな克服、小民的立場への大きい飛躍、前進をめざす自覚と決意でもあつた。それ故にこそ外ならぬ、民生ニ（民衆の豊かな生活）を發展させ、強者にしいたげられてゐる多数の弱者を扶けるための科学研究が決意されたのである。要約して云えば、彼がそこから脱け出さうと摸索しつつ、中々果し得なかつた、擁護の立場の、小民的立場への止揚が、意識され、自覚されたのである。現実把握のし方、思维方法と内容を小民的側面において止揚ニ変革しようとしたのである。当然、地理的一時的に祖国と「言治」集団を去るのでなくて、彼の思想の質的飛躍のための、言治抉別が決意されたと云つ

てもよいだろう。

あれ程、多量に書きつづけた「言治月刊」への筆を、彼は第五期（多分、一三年一月一日発行）では絶つてゐる。第五期における彼の沈黙・絶筆。そして第六期（恐らく同年一月一日発行）にも僅かに二篇。而もその中の一篇は遊記〔遊碣石山雜記〕であり、他の一篇は「文豪」と題する論稿である。遺憾ながらこの二篇を私は見得ないのであるが、後者「文豪」とはトルストイに關するものではなからうか。而も、後に、郁嶷が、李大釗が、トルストイに學んで、人民は英雄への依存をたち切り、人民自身の自力自救を計れと高唱し、郁嶷自身、大きいショックを受けた、と伝えてゐる、その反英雄論、とりもなおさず、袁世凱への抉別を意味するような論稿ではなからうか。そのことの正否の確認は、後の研究に俟ちたいが、ともあれ、本誌第五期の絶筆と第六期の二篇の發表とは、如上の決意と自覚を、彼がすでに実行に移しつつあつたことを示してゐよう。だが、それが、決定的に実践されたのは、右の決意と自覚がなされてから、更に數ヶ月後、即ち、第二革命後、袁一派の專制主義支配が、一層激化してからのことである。このこと

は、彼が「言治」を去り、日本へ渡つてからの思索と実践

の内容・方法と密接につながる重要な問題だと思ふのだが、ともあれ、「言治」決別、日本への留学を實踐した過程と、その心情についての、彼自身の言葉を知ろう。李大剣はそれらを、章士釗にあててこう書き送った。

「私は先に独立周報を愛読し、あなたと（康）率群先生を敬慕すること師友を兼ねる程でした。だが、去年（一三年）華中・華南に叛乱が起り（第二革命のこと）、周報が停刊されましたので、政俗は靡敝し訛言が繁興しましたにも拘らず、それを匡正する正論を得ないこと数ヶ月でした。而も、江南の戦乱で郵便も杜絶えたため、問学の私信によつて先生方に教えていただき得ないことも亦数ヶ月でした。心中の鬱悒を申訴出来なかつた私は、風雲の吹きあれる残冬、二・三の友人と日本にやつて来ましたが、私のぶつかつている問題を問う術もなく（問難無地）、素漠と偶居して居りました。ところが、偶然、書店で「雅言」をみつけて読み、それが率群先生の創刊されたことを知り得たのです。ついで、同誌の広告で、「甲寅（月刊）」が出版されたこと、それがあなたの創刊されたものであることを知つた私の喜

びは一層大きいものでした」と。

彼は、第二革命の勃発とその後の諸情勢、諸過程を直接の契機として、恐らく、一四年の一・二月の頃^⑤、日本への留学を決行したのである。そして、右の文章から、ひしひしとくみとれるように、異国日本で、解き得ない諸問題を抱きながら鬱々と索居して而も模索と探究をやめなかつたとき、「雅言」と「甲寅月刊」を見出して歓喜したのである。「言治」集団を去り、編輯部長の要職を捨てて、苦難だが、歴史を前進させる激流へ身を投じたのである。「言治」決別——それは、矛盾、混乱、混迷の過程で、摸索しつづけたこれまでの諸実践に、終止符を打ち、最終的に擁護の立場を止揚する、決定的な実践、彼の新しい出発であつた。何故なら「言治」決別を實踐した、その瞬間から、彼は新しい、これまでにはみられない探究を、開始したからである。

2、新出発——救国論の展開

日本への留学の過程を語つた右の文章は、単に、鬱々たる心情を訴えるだけのものではなく、貨幣と物価購買力に関する庚率群の見解に対する、章士釗への経済学上の質問

書なのである。のみならず「甲寅月刊」同号（一ノ三）に、彼は早速自己の問題の一端を発表、世に問うたのである。「風俗」と題された重要な論稿がそれであるが、彼自身の新しい救国論とも云うべき、この論稿にふれる前に、如上の彼の自覚と決意を、実践に移さしめたもの——祖国の現状について、簡単に素描しなければならぬ。

李大釗が、擁袁「言治」からの飛躍をめざして摸索、決意していた時、国内の諸情勢は恐ろしい勢で激変しつつあつた。袁一派が、その大借款と軍閥力をフルに活用して、国民党勢力の軍事的抵抗に第二革命を圧殺したのである。

この過程を、李大釗は早く、「二種勢力相衝相盪……蒼生水火、膏血横流」という形で受けとめていた（「言治月刊」（第四期）是非）。二種勢力というとき、すでにその中には袁一派も含まれており、従つて第二革命の両勢力を一層客観的に洞察しようとする彼のとらえ方の変化がくみとれるのであるが、

それまで、国内の平和的統一と内戦の防止を高唱し続けた彼が、この「人民の膏血横流」という現実から受けたショックが、いかに大きかつたか、右の短い一句から推察出来るよう。本誌第四期の「国内記事」が、第二革命の勃発、進

行の過程について沈黙していることも、却つて、同人達がそれから受けたものの、不気味さを告げている様だ。だが、第二革命後の諸過程は、第二革命のもつ意味を一層あらわに示さずにはおかなかつたのである。国民党の軍事を圧殺した余勢をかつて袁一派は、その後も北京に留まり、民主的な憲法を制定することによつて、彼らを抑制しようとした国民党勢力に対して、クーデターを敢行（一三・一一・

四）、国民党を暴力的に解散せしめるとともに、かつて同党に籍をおいたことがあるだけの国会議員を含めて、四三八名の議員資格を強奪し、事実上、国会を取りつぶすという、蛮行の限りをつくしたのである。だが、彼らの暴圧が一国民党勢力にのみ向けられるものでないことが次第に明らかになされた。「新青年」創刊号（「青年雜誌」）への二つの投書の一つは、第二革命後、安徽省の学校が、巡按使によつて全毀された。その後やつと一、二割が復興されたが、それらも亦、つぶされる怖れがあり、学界が大恐慌に襲われている。上海の好い学校を教えて欲しいという悲壮な訴えである。事実、軍閥を頂点とする旧地主、官僚勢力によつて、安徽省だけでなく、全国的に、近代の学校と民

主的学会とがとりつぶしの危機に迫りこまれたのである。^⑤

——近代教育は革命の教育であり、学校は革命勢力培養源であるという口実の下に。^⑥ 取りつぶされないまでも、孔孟儒教教育が、堂々と復活・強化され——とくに小学校で——或いは、北京大学その他の北京国立諸学校でさえ、極度の予算削減に悩まされたことが示すように、^⑦ 学校教育はその財政的危機によつても脅かされ続けた。欧米人経営の学校はいよいよ榮えたけれども、祖国愛と向学心に燃える凡てのインテリにとつて、これらがいかにきびしい苦惱であつたことか。学校・家庭の儒教教育に不満と抵抗心を熱くしていた知識人達は、吾々日本人には想像もつかぬ程のはげしきで、彼らの期待を新聞・雑誌に寄せた。事実、新聞・雑誌はきびしい圧迫と現実に対抗するための、新らしい思想を鍛える場として、重大な役割を荷つていたのである。^⑧ だが、第二革命後の、国民党とその友党の機関紙のとりつぶしを先触れとして、言論界も、他の民主的な研究・教育諸組織と同様、袁一派の暴圧を免れ得なかつた。呉虞が欧米及び日本の近代的諸学説と、中国の諸思想とを比較検討し、十年に亘つて營々と築き上げた研究の成果の一つ、

「非儒説」——これを掲載した成都の「醒群報」が、内務部長の電令一本で四年間も（一三—一七年）とりつぶされ、それを契機に、成都の諸新聞が、儒教批判論をのせることをはばかつたことが示すように、^⑨ 袁一派の言論圧迫は苛烈を極めた。彼らの帝制運動が、公然化しなかつた一四年でさえ、「馬鹿馬鹿しい記事をのせ、子供のままと遊びのような文章を書いて、記者が禁錮され」まして「軍閥を批判すれば、記者はたちまち桎梏された」^⑩。とりつぶしを免れた各紙は専ら「政府に迎合し、百計献媚」し、或いは、大新聞でさえ、その紙面を日毎、芸妓の写真で、麗々しく飾るといふ有様であつた。^⑪ 袁一派の機関紙、亦はそれに類似する誌紙だけが、公然と専制主義論を張つていたのである。^⑫ 出版事業を経営していたある人物が、「国会解散以来、百業俱に廃され、国内は失業者に満ちている。私の商売も販路は去年（一三年）の1/10に減り、今は餓死を待つばかりだ。その上、税金は苛烈、刑罰はきびしい。官吏・兵匪・偵探^{スパイ}以外の人民にはも早や生きる路はない。生路を絶たれたのは政党だけではないのだ。吾々に残された唯一の希望は外人が吾国を分割してくれることだけだ。その時の

用意に世界語を学びたい。方法を教えて欲しい」と訴えているのは、当時の生々しい現実を吾々に伝える。かかる現実の推移は、国民道徳、国民教育の振興に絶大な期待をかけていた李大釗にとつて、大きいショックであつたに違いない。だがインテリだけでなく市民が日常出入りする北京の飯店や茶館に「諸君小心なれ」「国事は談ずる勿れ」の聯語がはりめぐらされ、人民が政治を語ることを防ぐため、全国的に「瓜牙鷹犬の間蝶が密布され」、軍閥軍隊が、ひとたび地方に向くと、一紡績工場の女工が全員強姦されるというようなし方で、反動支配の嵐が吹き荒れたのである。いや、漸生が、欧州諸国の普通植民地人民にさえ選挙権がある。その権利を許されていないのは生蕃だけだ。今吾々中国人は、植民地人民の資格すらなく、一生蕃の待遇を押しつけられているのだと叫び、洗心が、現在の中国は民国でなく官国であり、總統制でなく、總督制だと断じたように、民国の全機構が、専制主義国家に逆転されようとする現実が現出したのである。亡国、亡国の深い嘆声が国内にあふれて来る。「言治」という狭い世界——だが、彼自身をきびしく制約していたその世界からの脱出を摸索し、

決意さえしてただけに、これらの情勢の激変を、李大釗はどれ程ひしひしと感じとつた事であろう。吾々には、その詳細を伺い得ないが、彼が、彼自らの飛躍を「政俗靡敝」「訛言繁興」「問學私信の杜絶」という短い三句にかけ、その心情を「心中鬱悒」と自語していることを重視するのは、歴史研究者の範圍を逸脱した憶測、独断であろうか。だが、祖国の「危機万状」と、その根源をつきとめ得ない自らの思想的な弱さとの矛盾——この根本的矛盾を諸実践を通じて自覚認識するまでに自己を高め来つた彼を考察して来た吾々には、第二革命後の国内の「亡国」的な諸矛盾の深化拡大こそ、右の自覚と決意を實踐に移さしめた直接の契機であつたことは、みのがすわけにはいかない。少くとも、渡日後の、最初の論稿「風俗」が、それを示してくれると思う。何故なら、これは、亡国亡国の嘆きに対する、彼の新しい対決であり、それをもたらすものへの彼自身の闘いの宣言でもあるからだ。——この段階ではそれが次に見るようにいかに観念的であろうと。

——人々は亡国亡国と恐れるが、亡国より怖ろしいのは「亡群」である。「群」とは、「同一思想を具有する者の総

称」であり、「他人に暗示力を与える」様々な「層級」の結合体である。これは、先ず、そこに生き、それに所属する構成員が、先天的にも後天的にも制約されるを得ないという意味で、次に、「人群之自身亦実有自作之業」——つまり、群はその個々の構成員から独立した自己運動を行うという意味で、あくまで、客観的な存在である。だが、それは構成員とつてどうにも出来ない客体ではなく、むしろ、個々の構成員は積極的に「群」の運動＝発展に関与しなければならぬし、亦可能である。何故なら、本来的に群は、他人に暗示力を与える人々の「階層」によつて構成されているからであり、而も構成員の「共是の意志」こそ群にとつてかなめだからである。後者、「共是の意志」が鬱して形成されるのが「風俗」であり、「群」そのものが客観的な「形」「質」であるのに対して、「風俗」は群の「神」又は「力」である。そしてこの風俗は変化＝運動してやまないものであり、むしろ、「群」の盛衰は、風俗の発展と衰えによつて見定められる。即ち、人心、風俗が道義に赴き、勢と義が統一されれば、その群は向上発展しているのであり、それが利に走り、勢と利が結合されると群は滅

亡する。所で「群」のこの盛衰に対しては、群の指導者＝「群枢」の果す役割は特に大きい。それが利祿・権勢を以て風俗を賊うときは、群の発展のために、構成員はこれに抗し、それを倒さねばならぬ。——「群」という概念をこう設定しつつ、彼はこの視角から、祖国の社会を分析し、それを衰亡させつつある勢力に立ち向う。——その政府と「執政の人」は「英雄・聖人」と自称しながら、「欺世盜名」している輩であり、「争權攘利之桀」である。「詐奕機譎」の將軍・雄豪であり、兵権を掌握している「強藩」である。更に、「暮夜叩門」「以求官為業」の士大夫があり、彼らはあらゆる才智をしぼつて、「党人之狂」「政府之暴」の基礎的な勢力を形造つてゐる。朱舜水是、明の滅亡の大半の責任を当時の士大夫に帰したが、民国現在の士大夫の罪は明末の士大夫と比べてどうか。吾国衰亡の責任の大半は彼らにあるのだ——「群枢」勢力をこう痛烈に批判し、その下での人民を「疾風」にさらされた「秋草」にたとえながら、彼は新しい知識人の責任の大きさとその内容を次のように主張する。——「英雄・聖人」恃むに足りず、「獵官害民」の士大夫亦、救国の責を荷い得ない今日、単なる術

単なる力ではとうてい祖国の衰勢は挽回し難い。今こそ「学問」が必要であり、而もその「昌学」を果し得るのは「匹夫」のみである。「匹夫の昌学」を自覚し、「求仕の風を敵に杜し」「恬として百姓の分に安んじる」人々の力を積み重ねて、「群力」を結集しよう。「群」は發展し、救国の途は必ず拓けると。

「言治」――擁衰の立場からの飛躍に向つて摸索していたときの彼の根本問題は、中国の黑暗社会問題であり、不良政俗の問題であり、それをどう捉え、どう解決するかということであつた。ここ、「甲寅月刊」の最初の論稿では先ず、「群」――「社会」が、客観的存在して明確に認識され、その運動、發展の方向が追究され、而も、「群」を衰亡に導く「群枢」勢力に対抗して、「群」を救国の方向に、積極的に發展させる「匹夫」と、その責任、その力とが、明確に、確信をもつて把握されたのである。これまで、彼の思想――現実把握を制約して来た弱さ、即ち、支配と被支配の権力關係把握のあいまいさが、こゝで不十分ながら克服され、「政党之暴」とならんて、「政府之暴」及びそれを支える士大夫階層が、はじめて、これまでにない明確さで掴まれたの

である。かつて、袁世凱に頼らざるを得ないとさえ考えたあの側面を破つて、堂々と「政府」が批判され、「聖人英雄恃むに足りない」という視角、「獯官害民」の士大夫の亡国責任を追究する思惟方法が展開されたのである。対決すべき対象の認識は、同時に、味方の確認でもある。彼は、官途につかず、恬として百姓の分に安んずる「群」の結集をよびかけ、而も、「匹夫」の立場を「昌学」――新しい学問、科学で固めることをも高唱したのである。ところで、敵味方の確認は、自らの立場の確認に通ずる。彼は、既に述べた形で救国の為の「群力の結集」を他の「匹夫」によびかけるとともに、自らの決意をこう宣言したのである。

「国一日未亡、責一日未卸。我尽以我責以救亡国」と。朱舜水研究で、舜水の学者としての在り方に限りない尊敬と情熱を燃やしていた彼は、その先人の途を、自ら歩むことを、自らに告げたのである。国民党、袁一派、その何れにも属さない、従つて、より多くの匹夫の苦悩を背負いつつ、だがより深く、広い責務を自覚しつつ、二十世紀の朱舜水が新しい産声を挙げたのである。「言治」抉別はやはり、祖国の新しい危機に対決する、新しい人間の誕生であつた。

こうして、日本での、彼の歩みが始まる。章士釗を指導者とする「甲寅月刊」集団とともに。新らしい出発は、新しい矛盾を内包しなければならなかつたが。

註

① 「Panism 之失敗 Democracy 之勝利」〔太平洋〕一ノ十、一九一八・七・一五刊)「Bolshevism 的勝利」〔庶民的勝利〕〔新青年〕六ノ二、一九一八・二・一五刊)がその指標。

② 中華民国以前のものに

- (1) 王森然氏「李大釗先生評伝」〔杏嶽書屋、民国23・6・10初版〕「近代二十家評伝」所収——
- (2) 何幹之氏著、日本青年外交協会訳「近代支那文化思想運動史」同会昭和14・8・10刊
- (3) 郭湛波氏外著、神谷正雄氏訳「現代支那思想史」生活社昭和15・3・15刊、「現代支那思想の諸問題」生活社昭和15・12・3刊などがあり、中華人民共和國後のものに

- (4) 陳伯達氏「五四運動と知識份子的道路」
- (5) 「李大釗同志革命史略」
- (6) 吳玉章氏「記念李大釗同志光荣殉難の二十週年」
- (7) 范文瀾・王南氏「中国早期的唯物歴史科学者——李大釗同志」——以上、東北大学編「五四紀念文輯」東北新華書店、一九五〇・四、初版所収——
- (8) 鄧拓氏「誰領導了五四運動」北京人民日報一九五〇・四・二九
- (9) 華崗氏「五四運動史」上海、海燕書店一九五一・一・初版
- (10) 劉弄潮氏「領導五四的主將——李大釗同志」進歩日報一九五一・五・四
- (11) 石峻・任繼愈・朱伯崑氏編「中国近代思想

史講授提綱」人民出版社、一九五五・三、初版

- (12) 丁易氏「中国現代文学史略」作家出版社一九五七・七初版
- (13) 劉毅松氏「中国新文学史初稿」作家出版社、一九五六
- (14) 王同策氏「知識分子的崇高典范——紀念革命先烈李大釗同志殉難二十九週年」光明日報一九五六・五・一〇などがある。

以上の外、張次溪氏「李大釗先生伝」などが出されているが未見。

- ③ (1) 張次溪氏「李大釗先生著作年表」(増訂稿)——「中国現代出版史料甲編」所収
- (2) 劉弄潮氏「李大釗著述目錄試編」——「光明日報」、一九五一・二・三
- (3) 文操・蔡尚思氏「守常同志遺著目錄」——上海「大公報」一九五一・五・二四
- (4) 文操氏「試編李大釗(守常)遺著繫年目錄」(一)(二)(三)「學術月刊」一九五七年、一・二・三。以上の中、(2)、(3)は未見であるが、(4)はそれらを集大成したものの様である。但し、(1)は、「言治月刊」第一—四期の中の重要な著作を落していたり、著作年月及び発表誌不明の部に入れたり、完全でなく、(4)は、同じく「言治月刊」第一—四期所収の中の多くが、一九一四年及び、一九一五年に発表されたものとして取り扱っている。京都大学人文科学研究所蔵の「言治月刊」によれば明らかに、いずれも一三年発表である。この発表時期は本稿にとつて重大なので、本文にこの期の著作目録を掲げておいた。

④ 劉瑩氏「李大釗軼文」此日「考」——「歴史研究」一九五七年第一号。

- ⑤ 本註②の諸研究を参照。
- ⑥ 顧頡剛氏著・平岡武夫氏訳「ある歴史家の生い立ち」——古史弁自序——岩波書店・昭和28・9・10刊。
- ⑦ 英国駐杭州領事報告・楊錦森節訳「中国実業不振の原因」——「民国経世文篇」正編・第三冊・実業一、総論——
- ⑧ British Parliamentary Papers, China No. 1 (1912) p 28——田村幸策氏「最近支那外交史」上——外交時報社・昭和13・4・1刊より引用。なお同氏「支那外債史論」——外交時報社昭和10・11・10刊——をも参照。
- ⑨ 第一回、一二・二・二八——二〇〇万両。
第二回、一二・三・九——一〇万両。
第三回、一二・五・一七——三〇〇万両。
第四回、一二・六・一二——三〇〇万両。
第五回、一二・六・一八——三〇〇万両。
——四村氏、前掲書——
- ⑩ 田村氏、前掲書。
- ⑪ 周宏業「善後借款詳論」——「庸言報」一ノ一〇、民国2・6・1刊——などを見よ。
- ⑫ 田村氏、前掲書、平川清風氏「支那共和史」上海、春申社、大正、9・9・25刊。
- ⑬ 資本に乏しく、且つ、滿・蒙に、いわゆる特殊利権をもつ、日・露尙国対、米・英・独・仏・四国の矛盾。亦、借款担保や借款金の使途の管理・監督のための、ポスト——塩税総監督官・外債局長・会計検査顧問等——の奪い合いに示された
- ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊽ ㊾ ㊿
- ㊾ ㊿

党之産生」第四期「楊行瑞「忠告政党与議員」など参照。

④⑥ 白堅武「痛言」(本誌第二期)、「憲法中国家主権之規定」

(同上)「論庸言報張君東蓀說統治權之誤点」(第三期)「地方機関参与憲法之商榷」(同上)「民国憲法解釈権應歸法院」(第四期)、「論憲法中外交権之規定」(同上)など参照。

なお、白堅武は、「北洋法政学会」の同人ではない。李大剣の親女の一人であつたことは、彼が李大剣に贈つた詩—本誌四期、文苑—で知られる。

④⑦ 「北洋法政学会」の「啓事」——本誌第四期巻頭——

④⑧ 「隱憂篇」参照。

④⑨ 本稿七八頁、「李大剣著作目録」5・8・9参照。

④⑩ 本誌第一期・第二期の「広告」を見よ。

④⑪ 前掲、文操氏、「貴著繫年目録」(一)——「學術月刊」一九五七年一号——

④⑫ なお野原四郎氏「中国におけるヒューマニズムの伝統」(宝文館「現代ヒューマニズム講座」3は、当時の彼のマルクス主義とヒューマニズムの關係を論じている。

④⑬ 註④⑦参照。

④⑭ 張祖蔭「震沢之農民」——「新青年」四ノ三「社会調査」所収——

④⑮ この蔣方震とは、日本陸士第三期卒業生で、梁啓超に師事し、彼の「清代學術概論」に序文を書いた蔣方震であろう。

とすれば、この自殺は未遂に終つたと思われる。蔣と李大剣の關係は不明。

④⑯ 李大剣「貨幣与物価購買力」——「甲寅月刊」一ノ三——

④⑰ 章士釗及び「甲寅月刊」集團と李大剣の關係については、別稿「甲寅期の李大剣」参照。

④⑱ 註④⑰参照。

④⑲ 郁巖「政治与民意」(太平洋)一ノ八、一九一七・一一・一五刊)によれば、その著作時期は不明だが、李大剣は、トルストイ主義に学んで、大要次の如き論稿を発表している。

「聖智と凡民との智能の差は本来的に著しいものではない。

英雄に頼ることによつて人民が蒙る恩恵、利益よりも、それによつて失う損失の方が大きい。英雄に依存すれば、独立自主の人格を失い、奴隸服従の地位に墮るからである。人民は須らく、自力自救せよ」因みに、老子の「聖人死せずんば大盜止まず」の精神がトルストイ主義と結合されていることも、非常に意味深い。

④⑳ 李大剣「貨幣与物価購買力」——「甲寅月刊」一ノ三——

④㉑ 右の原文に「殘冬風雪」とあるのに拠る。殘冬とは旧曆によれば十二月だが、新曆によれば、一・二月のことを指す。

④㉒ 毀学の危機については、「雅言」第一年第六期、「国内記事」「教育豈可廢乎」、高一涵「民福」——「甲寅月刊」一ノ二——、白沙「教育与衛西琴」——同上——、韓伯思「復旧」——同上、一ノ三——揚超「歐美教育之進歩及其趨向」——同上、一ノ四——民主的学会とりつぶしについては、たとえば「北京留法儉学会简章」——「新青年」三ノ二、参照。

④㉓ 註④㉒の高一涵及びその他の論稿を見よ。

⑤1 註②の諸論稿及び管侯「評小学誌経」——「雅言」第一年第十期——同「談論語」——同上、第十二期——

⑤② 註②の「雅言」第一年第六期「国内紀事」、及び管侯「現勢之中華民國観」——「雅言」第一年第六期——、「長沙社会面観」——「新青年」七ノ一——

⑤③ これらについては、未定稿「甲寅期の李大剣」でふれる予定であるが、当面、これまで余り注意されなかつた無名人の「甲寅月刊」や「新青年」への投書欄を見よ。

⑤④ 戈公振氏「中国報学史」、三聯書店、一九五五・三初版。

⑤⑤ 「新青年」二ノ五への呉虞の投書参照。この史料は亦、呉虞——陳独秀、「甲寅月刊」——「新青年」の人的關係を示す史料としても貴重であると思う。

⑤⑥ 章士釗「政本」——「甲寅月刊」一ノ一。

⑤⑦ 劉陔「新聞記者与道德」——「甲寅月刊」一ノ二。

(八七頁より)

ニュー・ディールにおける独占対策と

基盤としての思想的展開 橋 亮右

アレキサンドロス大王の政治思想に

関する一考察 大牟田 章

(修士課程)

シュレージエンにおける農業変革

末川 清

革新主義運動について

志邨 晃佑

人文地理学専攻

北海道農業の人文地理的考察

池上 一誠

滋賀県西北部の交通路と集落の歴史地

理的考察 井戸 庄三

綾部盆地における農業構造の歴史地理

的研究 大槻 守

地方小都市の歴史地理的考察 大脇 保彦

大阪市の周辺と通勤交通 木村 辰男

近郊山村におけるアーバンゼイション

塚田 秀雄

(修士課程)

都市域農業における專業・兼業の地域

的分化について 井上 一男

古代行政区劃の地理的意義 服部 昌之

核心地域と周辺地域 山澄 元

考古学専攻

(修士課程)

エジプト・メソポタミア・中国におけ

る帝王陵成立過程の比較研究

小野山 節

⑥1 註⑦参照。

これについても、未定稿「甲寅期の李大剣」参照。

⑥② CC生「生機」——「甲寅月刊」一ノ二——

⑥③ 伍子余「言之者無罪」——「甲寅月刊」一ノ七——

⑥④ 高一涵「民福」——「甲寅月刊」一ノ二——

⑥⑤ 章士釗「政本」——「甲寅月刊」一ノ一——

⑥⑥ 漸生「參政院」——「甲寅月刊」一ノ三——

⑥⑦ 洗心「官国与總督制」——「甲寅月刊」一ノ三——

⑥⑧ 章士釗「政本」その他「甲寅月刊」所収の諸論稿参照。

⑦⑦ 「甲寅月刊」一ノ三。

補註① 徐宝山とその暗殺については、「言治月刊」第三期、「国内紀事」参照。

——一九五七・四・六・脱稿——

Recommencement of *Li Ta-chao* (李大釗)

—mainly on his political arguments in the
“*Statesmanship*” (言治) period—

By

Hikosichiro Satoi

Among those whose world-wide fame of roles in history has unexpectedly interrupted the further research, there is *Li Ta-chao* (李大釗), too; especially on his growth toward Marxism we have almost nothing. Then, this paper shall be dedicated to make clear the very point heretofore neglected, how he, not born a fighter for Marxism, cast off his pro-*Yüan Shih-k'ai* (袁世凱) views from 1912 to 1914 through his hard-toiled study in the pro-*Yüan Shih-k'ai* (袁世凱) group of students *Pei-yang* (北洋) Researching Society for Law and Politics: and its organ paper “*Statesmanship*” (言治).

Kyokunkanasho (教訓仮名抄) at the Beginning of the Edo Era

—on the lineage of *Shunkansho* (春鑑抄),
Santokusho (三徳抄) and *Irinsho* (彝倫抄)
in the history of ideas—

By

Kanji Imanaka

Here we have tried to trace the lineage of *Kyokunkanasho* (教訓仮名抄) by Confucianists at the beginning of the seventeenth century because of its close bibliographical and ideological relation to *Sishokanasho* (四書仮名抄) by the students of classicists in the *Muromachi* (室町) era.

Judging from the attitudes of the Japanese Confucianists since the Middle Ages to introduce the *Shushigaku* (朱子学), especially *Razan* (羅山) in *Shunkansho* (春鑑抄) and *Santokusho* (三徳抄) and *Shakugo* (尺五) in *Irinsho* (彝倫抄), the structure of idea in *Kyokunkanasho* shall be explained in view of ethical history of ideas.